

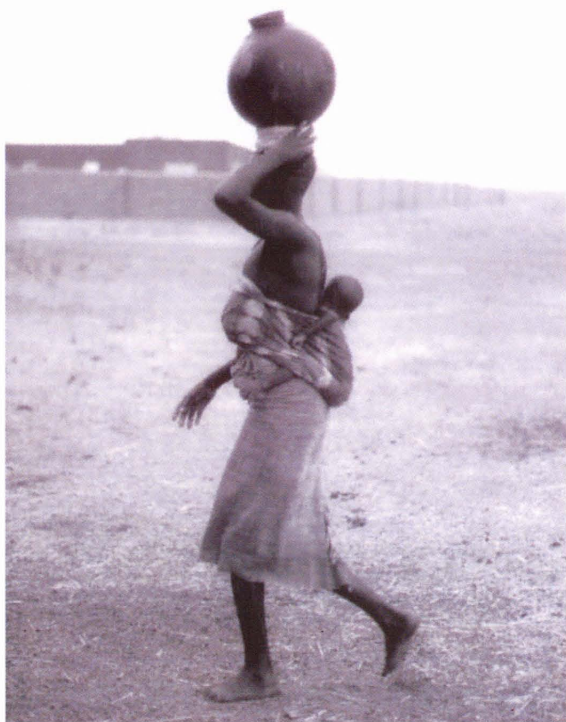


各班の目指すもの

第2班

身体技法および感性の資料化と体系化

川田 順造（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科・教授）



非文字資料である、この一枚の写真（1976年、西アフリカ・ブルキナファソで川田撮影）が、どれだけ豊かな情報を含んでいるか。まず、見事な頭上運搬。重力が真下におりる合理的な運搬法であり、かつては日本を含む世界の広い地域で行われていた。ただ、特殊な身体技法を要するのと、髪結い被り物との関係などから、次第に他の運搬方法に取って代わられた。次に球形の壺。この女性が運んでいるのは空の壺だが、水、酒などの液体をみたした場合、球形は最も安定した運びやすい形だ。底の平たい容器だったら、中の液体が揺れ、重心が片よってこぼれてしまう。球形・半球形の土器は、西アフリカ社会で鍋としても広く用いられているが、中華鍋の例を挙げるまでもなく、円い底の鍋は火のまわりがよく、調理がしやすい。電熱の調理器が普及する前、日本の飯炊き釜も、鍋も、底が半球形だった。そしてこの地方には、

球形の土器を作る独特の技術が発達している。

第三に、赤ん坊のおぶい方に注目しよう。日本の「おんぶ」では、赤子はおぶってくれる人の背中の上の方に固定され、両肩に手を掛けることもできた。赤子の両脚は軽く曲がって開いた状態になる。ところがこの写真では、赤子は背の下の方、尻の上に、両脚を付け根から深く曲げた格好でくくりつけられている。これは西アフリカ住民の体形が、脊椎の下方で前方湾曲しているところからきている。この地方では授乳期間も長く、日本の畳や板の間で一般的だった這い這いが、住居の構造上できないため、赤子は母親が歩いたり作業をしている間も、こういう姿勢で固定されている。

赤子のおぶい方に私が注目するのは、この赤子の姿勢が、西アフリカの作業や休息の姿勢にきわめて多い、上体の深い前屈姿勢と、それを90度回転させた投げ足姿勢とよく対応しているからだ。日本のおんぶの仕方や、中部・東北地方で広く用いられた「エジコ」など、浅い円筒形の容器に赤子をあぐらをかいた姿勢で閉じこめておく保育法と日本人の低い座位の作業・休息姿勢、ヨーロッパで行われていた、新生児の両脚を真っ直ぐ伸ばしたまま布で巻いて固定したり、歩く前の赤子を、這わせないために立てておく木や藁で作った筒、水平に回転する木の腕で上から吊す道具と、ヨーロッパでの立位や高座位の作業・休息姿勢と対比すると、それぞれの保育法の特異性が、成長してからの身体技法との関連でよく分かる。

一枚の写真という「非文字資料」から引きだせる問題について述べたが、身体技法（文化によって条件づけられた身体の使い方）としての頭上運搬や赤子のおぶい方、壺という道具や、球形の壺を作るこの地方特有の技術などについての問題意識があってはじめて、この「非文字資料」も活用できる。そしてそのような問題意識は、西アフリカとは著しく異なる日本やフランスの同種の事柄との対比の中で、意味をもってくるのである。

第2班の課題は、いま一例を見たような、身体技法、道

具、技術文化だけでなく、それらと密接に関連する、さまざまな感性、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうなどを通じて感知されるものはたらく領域や、相互の結びつきを明らかにしてゆくことである。まさに「非文字資料」

を活用しなければならないことであり、既成の研究が乏しいこの分野で、私たちCOEの研究に課せられた任務は、難しいが、やり甲斐があるといわなければならない。

各班の目指すもの

第3班

環境と景観の資料化と体系化

香月 洋一郎（神奈川大学日本常民文化研究所・教授）



本プロジェクトの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」というタイトル自体、たいへん曖昧な一面をもっています。「文字資料以外のすべて」というものがその対象なのですから。そうして私たちの班のテーマ、「環境と景観の資料化と体系化」という表現もそれに負けず劣らず雲をつかむような茫漠さをもっています。身のまわりをとりかこみ、眼前に広がる世界のすべて、それを対象として資料化し体系化への道を探ろうというのですから。班の構成スタッフも、その専攻は歴史学、地理学、民俗学の三分野にわたり、プロジェクトが動きだしたばかりの今、ここでその着地点を明確にしぼりこむ形での説明は大変困難です。

もとより、とらえなければならないのは「環境」、「景観」といわれる複合的な事象のなかに存在する人間の意思のありようです。といってもその意思とは、為政者の統治感覚や姿勢のあらわれのこともあり、生産者の生産の場への配慮の場合もあり、またきわめて即物的な対応の結果もあり、ある営みが権利として認知されたプロセスの反映の場合もあり、シンボリックな意味が展開していく場の事例もあるでしょう。こうした世界では前の時代の矛盾が次の時代の可能性ともなり、その時代の「正義」がやがてそれとは異なるものへと転化していくこともあり得ます。

「環境」や「景観」といわれる世界の中には、それがどんなに激しくまた多彩に変化していても、そうした人間の営為のあゆみが、一見それとは気づかぬ形で、しかし明確にとどめられていて、私たちに語りかけてくれてい

るように思います。対象がどのように奔放で混沌としているように見えても、あるいは茫漠としていても、そこにはある類型やそうした重層が潜んでいます。それは人間社会を規制するものであるとともに、可能性を秘めている土壌でもあります。とらえどころのないように思える世界から、それをどのように浮きぼりにしていけるのか、そこにあらわれる時代性、社会性とはいったい何なのか、そうした模索の手の内をまず方法として示し得ること、換言すればそれが私達のテーマになると思います。

そのための具体的な道すじとしては、とりあえず①日本常民文化研究所の1930年代の生活記録写真や映像——写真は通称「渋沢フィルム」、現在活用可能なものは約4000点ほど——を活用しての景観の分析や時系列的研究、②日本の山村と島をいくつか選び、環境認識、景観認識とその変遷の調査研究、さらには③様々な人間の活動——この場合は主に政治的、政策的な背景をもつものや、また災害が社会にのこした痕跡の解説——の研究とそのデータ化、といったことを主要な柱にしてすすめていくつもりです。

前述したように、その対象世界は一見とりとめなく広がる世界です。その中から、人間社会を考えていくためのデータのすくいとり方を検討し、いやさらに踏みこんでいえば、データという言葉の意味するものの再検討を含めて新しい研究対象の世界を発見し、それを解説していきたいと希望しています。もちろんその先には、そうした成果と文字資料の関係性の追求、またそれをどう社会に発信していくのかといった問題があることは言をまちません。